

氏名(本籍)	すな かわ ゆりこ 砂 川 有里子 (大阪府)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第2094号
学位授与年月日	平成17年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	文法と談話の接点－談話における主題展開機能の研究－

主査	筑波大学教授	博士(文学)	湯 沢 質 幸
副査	筑波大学教授		高 田 誠
副査	筑波大学教授	文学博士	廣 瀬 幸 生
副査	筑波大学助教授		杉 本 武

## 論文の内容の要旨

本研究は、言語の体系的な知識としての文法と、談話において話し手と聞き手の相互作用の過程で生じるさまざまな機能との関連を、主題に焦点をすえて情報伝達という側面から探求することを目的とする。すなわち、現代日本語について、言語による分かりやすく効率のよい情報の伝達と談話の主題展開を予測させる効果的な情報の伝達という、情報伝達に求められる二つの機能的な側面が、文法的な表現形式とどのように関わりあっているのかを考える。言語の機能という観点から言えば、話し手の想定する聞き手の知識や意識に関わる認知的な要因と、談話の主題展開に関わる談話的な要因という二つの機能的な要因が、言語の文法形式の選択にどのような影響を与えているのかを明らかにするということである。そして、この目的を達成するために、談話主題のさまざまな展開過程に繰り返し現れるいくつかの文法形式の分布のあり方を量的に観察し、分布の偏りを生じさせる談話語用論的な原理を追究する。また、それと同時に、テキストの文脈を読み解いて、特定の言語形式の意味と機能を考察するといういわば質的な手法によって、その形式の選択を動機づける談話語用論的要因の説明をも試みる。なお、分析にあたっては、談話の展開過程に即した談話分析と、テキストの構造をマクロ的視点からとらえたテキスト分析とを併用する。そして、談話において文法の果たす複雑な機能を上に述べたさまざまな観点から記述する。

本論文の構成は以下の通りである。

序 章 文法と談話

第1章 文の主題と談話の主題

第2章 主題の階層性と表現形式

第3章 コピュラ文の構造と機能

第4章 文の種類と主題展開

第5章 分裂文の構造と機能

終 章 言語形式と談話機能

序章「文法と談話」は、本研究の目的を述べるとともに、文法と談話の関係に関する本研究の基本的な立

場を明らかにし、分析対象となる書き言葉の性質と分析方法について述べる。

第1章「文の主題と談話の主題」は、文の主題標識である助詞「は」に着目して、文の主題と談話の主題との関わりを考察する。

まず最初に、談話の主題は文の主題の複合や拡張といった単純なとらえ方では説明できないことを確認し、その上で談話の主題のとらえ方に話し手や聞き手の意識が向けられる「指示対象」に着目する立場と、談話の所産としての意味表象を表す「命題」に着目する立場のあることを述べ、最終的には即時的・局所的な談話処理と遡及的・大局的な談話処理の相互依存的な関係によって談話理解が進められていくものであることを論じる。

第2章「主題の階層性と表現形式」は、第1章での議論を受けて、即時的・局所的な談話処理と遡及的・大局的な談話処理の両側面から談話を観察し記述することを試みる。

談話の主題は談話の進行に伴って消長を繰り返し、消滅したり統合されたりしながら談話の階層的な構造を作り上げてゆく。このような見方のもとで、説明文のマクロ構造を質的手法を用いて記述する一方、同一指示語の分布調査やパラフレーズ調査と、談話主題の導入時の表現形式調査という量的な調査を手がかりとして、談話主題の階層性と文法的な表現形式を両者の関わりあいの中で記述する。そして、その結果を踏まえて、調査に用いたテキストは「課題持続型」と「課題推移型」というタイプの異なる二種のテキストであるにもかかわらず、いずれの場合も主要な談話主題を表す言語形式が特定の形式に偏っており、その形式が主題性のスケールの上位に位置づけられる格を有する名詞句であるということを示す。また、コピュラ文の述部に用いられた名詞句が、それ以降で重要な談話主題となる傾向が認められるという調査結果も提示する。

以上の二章は、即時的・局所的な談話処理と遡及的・大局的な談話処理という二つの側面から談話を分析し、名詞句の繰り返しや省略による同一指示、係助詞「は」や格助詞、コピュラ文、接続詞などの文法的な言語形式が、階層的な談話主題の表現に一定の機能を果たしていることを述べるものである。続く第3章から第5章は、以上の言語形式のうちからコピュラ文とコピュラ文の特殊な形態である分裂文を取り上げ、それらの情報構造とその表層的な現れである主題構造を記述するとともに、談話の主題展開という側面においてコピュラ文や分裂文が重要な機能を果たしていると主張する。

第3章「コピュラ文の構造と機能」は、同定文タイプのコピュラ文を取り上げ、この種のコピュラ文が情報構造の異なりに応じて談話の主題展開に関わるいくつかの重要な機能を果たすこと、また、同定文の談話機能が認知的な要因に支えられた語順の原理に即したものであることを論じる。本章で取り扱う談話機能は以下の4種である。

- (1) 新しい主題の導入
- (2) 古びた主題の再活性化
- (3) 状況的枠組みの提示
- (4) 談話の結び

同定文は情報構造の違いにより「後項焦点文」「前項焦点文」「全体焦点文」の三種に分類できるが、これら三種の同定文は(1)～(4)の談話機能を共有することによって微妙な使い分けを生じている。この章はその使い分けを質的な面から考察することによって、それぞれの文タイプが情報構造の違いに基づいた認知的な動機づけによって使い分けられていること、そして、その使い分けには次に示す複数の語順の原理が関わっていることを明らかにする。

<無標の語順>－関連情報近接の原理

前提情報文頭の原理－前提を構成する情報は文頭へ

引継情報文頭の原理－前から引継いだ情報は文頭へ

後続情報文末の原理－後に持続する情報は文末へ

<有標の語順>

緊急情報文頭の原理－緊急な情報は文頭へ

第4章「文の類型と主題展開」は、実験結果の数量的な偏りを解釈するという量的手法を用いて、コンピュータ文の特殊な形態である分裂文と談話の主題展開機能との関わりを考察する。

この章で用いるのは「談話展開テスト」という実験である。この実験は末尾に異なる文類型が用いられているテキストを与え、その先の物語を被験者に作文させるといったものである。この実験によって得られた作文データを用いて、「登場人物の表現形式」「登場人物の出現頻度」「登場人物の叙述のタイプ」という三つの観点から文の分析を行う。

その結果、「登場人物の表現形式」には各登場人物の主題性の強さによる影響が認められるものの、文の類型による影響は認められないこと、しかし、「登場人物の出現頻度」と「登場人物の叙述のタイプ」には文の類型による明瞭な影響が認められることを指摘する。すなわち、分裂文が後の談話で重要な主題となる指示対象を文末の述語部分で表現し、その指示対象を語り継ぎやすくする機能を持つこと、「は」で主題化した主語を持つ動詞文に「は」の主題化によるステージング効果が認められること、さらに、現象文に「談話主題の導入」と「背景的状况の提示」という二つの機能があることを述べる。

第5章「分裂文の構造と機能」は、分裂文という特定の統語構造にみられる文法的な特徴を明らかにして、従来は統語的な制約だと考えられていた現象が、実は談話的な言語使用の影響を受けることによって生じるものであること、すなわち、恣意的であると思われがちな統語構造も談話での使用においては機能的な影響を受けるという点で非恣意的な特質をも持ち得るものであることを解明する。

分裂文には「ハ分裂文」と「ガ分裂文」の二種が存在するが、述語名詞が格助詞を伴いにくいなどといった点でガ分裂文の方がより強い制約力を持つ。この種の制約はこれまで統語レベルの制約であるとされていたが、数量的な調査と考察を手がかりにしてこれらの制約が談話語用論レベルの制約であることを明らかにする。また、ハ分裂文とガ分裂文に見られる文法的な違いは、それぞれのタイプがもつ情報提示機能の違い、すなわち「焦点提示機能」を果たすか「特立提示機能」を果たすかの違いという、談話語用論的な要因に求められるものであることを述べる。

なお、統語的な制約力を持っているかのように見える分裂文は、実はそれ自体の情報構造に基づく談話での使われ方による機能的な異なりの現れであるということ踏まえて、ある形式が談話の中で繰り返し使われることによって文法が生じるというホパーやデュボアの説に、言語事象から具体的にその根拠を与えることができることを証明する。

終章「言語形式と談話機能」は、第1章から第5章までを貫いている機能主義的な言語観に基づいて、本論文全体にわたる論点をまとめるとともに、本論文が依拠する機能主義言語学における文法と談話の取り扱いの是非を論じて、談話における文法研究の課題と可能性を考察する。そして、類型論における普遍文法仮説の妥当性を検証するためには、本研究が行っているような個別言語の研究が欠かせないこと、加えて、本論文は国語教育や日本語教育の作文指導や表現指導に役立つ基礎的な研究の一つと位置づけられることを述べる。

## 審査の結果の要旨

現代日本語文法の研究は、近年著しい発展を遂げている。その中であって、本論文は、言語のいわば根幹をなす体系的な知識としての文法と、言語の実際の表出面・運用面である談話の機能との相互関連ないし交渉を、情報伝達という言語の最も根本的な機能の面から追究し、合わせて、それを通して文法と談話との関

係における言語学的な普遍性を明らかにしようとしている。この、本論文のテーマは、もとより言語学における根本的な課題の一つであり、以前から多くの研究者の関心を呼んできた。しかしながら、そのスケールの大きさを初めとして、いかなる方法を用いるべきか、またいかなる側面を分析すべきか等々、それに取り組む以前に生じる多岐多様な問題が研究者の接近を阻んできた。このような背景を顧みるところ、本論文はきわめて意欲的な研究であると理解される。

本論文は、上記の目的を達成するために、理論的にはギボンやガルシアなどの説によりつつ、「完結した談話所産」である書き言葉資料を用いて、文や文と文における主題のあり方、コピュラ文や分裂文の構造の特色、あるいは文の種類などを、主として伝達機能の面から分析している。分析方法が明確であること、その時々必要に応じて質的あるいは量的な面から論証を試みていることなどから、論旨明快であり説得力に富んでいる。研究成果は多々あるが、取り分け評価に値するのは、即時的・局所的な談話処理と週及的・大局的な談話処理という二つの面から談話分析を進めることによって、名詞句の繰り返しや同一物の指示、助詞「は」、コピュラ文などの文法的な言語形式が、階層的な談話主題の表現に一定の機能を果たしていることを明らかにしている点である。また、文法が談話の源となっていると言うよりは談話が文法を形作っているのではないかと提唱していることなども注目される。そのほか、日本語の研究を通して著者が得た知見と一般言語学で言う類型論との関連を追っている点や、文法と談話との関係の研究は言語教育に貢献すると指摘している点なども見逃せない。

ただし、問題が残されていないわけではない。例えば上記、談話が文法を形作ることがあるとしても、それによって両者間の関係のすべてを説明することができるのかどうか。また、書き言葉資料だけでなく、いわば談話の「最前線」にある話し言葉の分析も必要なのでないか。しかしながら、それは今後におけるこの方面の研究の発展を約束するものと言え、本論文の、日本語文法及び談話研究への多大な貢献は動かない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。